

教室の窓から

令和 7年
(2025年)5月
来須 真紀

対人援助的授業作り

今回は、授業づくりの基本を対人援助という視点でつづってみました。今回は、授業づくりの基本の一つアセスメントについてお話ししたいと思います。

授業づくりアセスメント基本の「き」

授業づくりをするうえで「うちのクラスどんなクラスかな」「どんな子がいるかな」「授業する教科や単元に対してどれくらい理解しているかな」という分析をすることが児童観と言います。児童観は、授業者から見て感じていることと授業をして感じていることそしてテストの結果や授業の成果物から書いていきます。

授業づくりアセスメントの基本の「ほ」

次に「この教材どんな教材かな。」「この教材を通じてどんなことが分かればいいのか」などといった教材をアセスメントします。これを教材観と言います。これは、指導要領を読んだり、教科書を分析したり、協議したりしてアセスメントを深めていきます。この教材観は授業者によってかなり違いがでてきます。

授業づくりアセスメントの基本の「ん」

3つ目は「うちのクラスの子こんな感じで、教えなきゃならないことはこれ」の次に「じゃどうやって教える?」という指導観です。個人的にはここが力の見せ所。どんな授業にしようかなと一番ワクワクするところでもあります。対人援助職でワクワクするとことがあるというのは、本当に幸せなことで、教員から福祉職になり、学校を外から見ることができるようになって気づいたことです。

実際に書いた児童観・教材観・指導観

以下は、私が「総合的な学習の時間」で書いた教材観・児童観・指導観です。ちょっと、いやかなり恥ずかしいのですが、実際はこんな感じで授業を組み立てていきます。

本単元では、スーパーの広告から必要な情報を取り出し、広告の制作者の意図や工夫を考えたり、お好み焼きの材料を買う場合の代金を四則計算を活用して計算したりして考え、これらの学習をもとに意図や工夫をもって自分で広告に表現していく単元である。お好み焼きという身近な食べ物が題材であり、児童の学習意欲を喚起しやすい。また、必要な材料の分量を調べたり、人数分の材料を上手に購入する方法を考えたりすることは、日常生活においても必要な力であり、本単元は、その力を養うことができる単元である。

本学年の児童は、言われた課題や活動には一生懸命取り組むことができるが主体的に学習に関わることが苦手な児童も多にいる。言語数理運用科においては、「好き」と感じている児童と「嫌い」と感じている児童と二極化が見られ、主体的に学習に取り組むことが苦手な児童は「嫌い」と多く答えている。また、特に情報を取り出すことに個人差が見られ、何をしたいのか分からない児童もいる。このような実態から興味関心を持たせるような発問や、個人の作業に必要な資料の見方やポイントになることを全体で押さえたり個人で作業する時間を十分に確保したりしてきた。また、自分の考えに自信を持たせるために友だち同士で考えを交流させたり教師の肯定的な評価の仕方の工夫をしたりしてきた。このような取り組みの中で、授業中の挙手が増えたり友だち同士での交流の際に積極的な姿が増えたりと変化が見られるようになってきている。

指導にあたっては、学習課題に対して思考を深め、自分の考えを深めたり表現したりするために以下のような事項にポイントを絞って指導していく。

- ① 指導内容、評価の観点を絞る。
- ② ワークシートや板書を工夫する。
- ③ 子どもたちが思考する時間を十分確保する。
- ④ ペアトークやグループトークを取り入れていく。

さて?だから?

私は現在、教員ではなく児童福祉司として働いています。児童福祉司の仕事をしていて、支援の方向性を決める過程が、授業づくりに似ているなと思いました。担任が見た観察、テストなどの具体的な数字、教材を通してどんな力をつけなければならぬのかそこへ向かう子どもたちの弱点と強みは何か。似てませんか?違うことは、学校は「クラス」という集団を対象にしていることが多く、福祉職は個人あるいは世帯を対象にしていることくらいでしょうか?

ゆえに、私は学校も対人援助職であると思いますし、福祉分野と教育分野は分かり合えると信じています。

「福祉の人たちは…」とか「学校は全く意味が分からない」という前に、同じ対人援助職であり、それぞれが得意分野を生かして職責を全うすることを考えたいと思っています。(自戒を込めて…)